

悟りへの道

——八正道における「正しさ」とは、その実践とその後について——

田中友紀乃

はじめに

仏教の最終目標は「苦」の消滅であり、一般的には「悟り」と呼ばれ、その悟りによって到達する境地が「ニルヴァーナ（涅槃）」である。そこへ到達するための釈迦が示した八つの正しい道筋、それが「八正道」と呼ばれる。しかしこの「八正道」、いざ実践しようとするのとひとつの問題に立ちあはだかる。それが八正道で前提とされる「正しさ」とは何かというものだ。今回は八正道の「正しさ」について重点を置き、その実践、悟りを開いた後に見える世界を『ダンマパダ』と『スッタニパータ』から読み解こうと考える。

原典に記されている「ニルヴァーナ」とは非常に抽象的な概念でありということだ。おそらく、言語化が非常に難しい領域であり、最終的には各修行者の体感に依存する部分が多い。よって、今回述べる内容も私が研究を通して解釈したものであり、他の学習者が研究すると違った内容になることは最初に断っておきたい。

筆者は悟りにおける過程において最も重要なのが「八正道」の「正しさ」とは何か」という問いだと考える。よって、本稿では大部分をその問いの考察に当てる。まず初めに「八正道」の概要をまとめ、その後に「正しさ」を「規律的正しさ」「道徳的正しさ」「悟りで必要とされる正しさ」の3つに分けて、さらに掘り下げて考察していく。それを踏まえて実践及び悟りを開いた後の変化について述べることで、筆者が考えるニルヴァーナへ到達するための一連の流れを示す。

1. 八正道

190, 191 : さとれる者 (= 仏) と真理のことわり (= 法) と聖者の

集い(=僧)とに帰依する人は、正しい智慧をもって、四つの尊い真理を見る。一すなわち(1)苦しみと、(2)苦しみの成り立ちと、(3)苦しみの超克と、(4)苦しみの終滅におもむく八つの尊い道(八正道 4)とを(見る)。八正道について詳しく取り上げていく¹。

上記のように引用した文はこの項目で取り上げる八正道についてである。四つの諦(真理)の内の一つで、実際に悟りへ向かう人々が行う行動などが示されている。

日本テーラワーダ仏教協会によれば、シンボルは法輪で、八つ揃って完全な形となる道という意味があるそうだ。「八正道はワンセットの道で、どれか一つを実行すれば他の七つも自動的についてくることをも表しています」とのことだ。確かに各項目ごとに見ると相互に関係し合い、それぞれ項目の状況の裏打ちが別の項目でなされる。例えば考え方が言葉や行動に現れるように、言葉や行動が考え方にも影響を及ぼす。

八正道の視点から見ればこの関係は日常生活においても言える相互関係で、普段から私たちはある意味、煩惱に汚れていながらも汚れているなりに完全な形で日々を送っていることとなる。

そのため八正道を実践するにあたり、現在の循環から脱却する必要がある。そのために必要なのは、八正道における「正しさ」とは何かという疑問の解決である。

仏教では「一ではない」と否定の形で物事が説かれるが、明確に「一が正しい」というような説かれ方はしていない。敢えてそうしているのか、それともしてはいけないことは明確である一方で、「正しさ」と言うのは元から明確にとらえられるようなものではないのだろうか。

(1) 正しさ

まず、「正しさ」と聞いて多くの人が真っ先に思い浮かべるのは「規律的

¹ 中村元(2019年)『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波文庫、36-37頁。

正しさ」だと考える。次に思い浮かべるのが「道徳的な正しさ」だろうか。この2者がどのように違うかと言うと、前者が主に「正義」と呼ばれ、対他的な関係における規律的な意味合いがある。後者は個人的な態度や行為、いわば「善」とほぼ同じ意味合いがある。どちらも人間社会で生き抜くためには重要な項目だが、はたして「悟りで必要とされる正しさ」と同義かと言われると、私は違うと考える。

そのように筆者が考える理由は2つある。1つ目の理由が両者とも仏教にとって滅する対象である「苦」が無ければ成り立たないものであるためである。特に「道徳的正しさ」の場合はこれのほかに、菩薩の「慈悲」と通ずる部分があるため「道徳的正しさ・慈悲＝悟りで必要とされる正しさ」と考えられそうである。しかし、そうであるならばブッダや如来など悟りの境地にたどり着いた存在達の行動に説明がつかない。

2つ目の理由が、どちらも「煩悩」を原因とする「苦」の認識過程と同じ過程を踏んでいるということだ。具体的にどういうことを2つの理由ごとに分けて述べていく。その後「悟りで必要とされる正しさ」を述べる。

①「規律的正しさ」「道徳的正しさ」

「規律的正しさ」「道徳的正しさ」は「苦」が無ければ成り立たないということについて、それぞれの項目ごとに述べていく。

「規律的正しさ」:

まず、「規律的正しさ」についてだが、「規律」と言うことは何かしら律する対象があることを暗示しており、何故律する必要があるかと言うと、「不快」、自己にとって「苦しい」からである。それが個人的にしる不特定多数からの意見にしる、まずは対象に対して「不快」であり、それを「排除したい」という欲求がある。

しかし、「私にとって不快なので排除します」という言い分では自己中心的すぎるし、何より自身が他の人間にとって不快で排除すべき対象と認定されかねない。それどころかそのような自分が汚く見えて自己嫌悪に陥り、

自滅する可能性だってある。それを回避するためには自分にとっても他人にとっても「私の主張は正当であり綺麗です」と表面上取り繕う必要がある。

例えを上げるとすれば、SNSで見かける誰かの非常識を吊り上げて匿名不特定多数の人間が攻撃する現象だ。個々人で生まれてから積み上げてきた常識や正しさに違反した人物を見つけるとその人物を「不正」だと認定し、不快に感じる。これが個人で済む不快感なら攻撃に発展しないだろうが、自分と同じく不快に感じる人が大勢いると分かった瞬間自身の中に飼っている「正しさ」はより巨大で強固なものとなり、あたかも徹底的に相手を攻撃することが正しいことかのように感じる。しかし、それは社会生活を営む上では都合の良い「正しさ」であるが、よく考えたらそれは偶々自分の価値観が成立する土地と時代に生まれた偶然で成立している「正しさ（仮）」に過ぎない。

いわば「煩惱」を抱えながらも、その真逆を求める本能を持つ人間にとって生命を守るためにも、社会的に生き残るためにも「規律的な正しさ」は必要かもしれない。しかし、それは根底に「苦」の原因である「煩惱」に基づいて作られたルールに過ぎず、ごく限られた世界観の中でしか通用しない。そのため、筆者は「苦」という根底が崩壊した世界であるニルヴァーナに向かう「正しさ」が「規律的正しさ」ではないと考える。

「道徳的正しさ」:

例えば貧しい人に施しを与えたり、弱者を暴力から保護するなどは昔から現代までどの地域でも「善」とされる行為である。実際、仏教でも慈悲の概念は重要とされているし、最近の仏教の動きで言えば台湾の慈済基金会在が良い例だろう。

しかし、それでも筆者は悟りで必要となる「正しさ」と「道徳的正しさ」は違うと思う。別にそれを否定しているわけではない。実際、修行段階で仏教における「正しさを」を道徳的なものだとして解釈して実践する修行者も多いだろうし、信仰の対象として熱く崇められる菩薩も「慈悲」という我々から見たら「道徳的正しさ」の実践者だ。しかし、それだと釈迦以前の多

くのブツダ達が何も語らずにこの世を去った理由や、釈迦が悟りを開いた初期に過去のブツダ達と同じく黙って残りの歳月が過ぎることを待とうと思ったこと、経典の悟りに至った人々、例えば如来などの行方が分からないということに説明がつかないと思う。

菩薩とは、ニルヴァーナに至る道筋を把握しながらあえて人々の救済のためにこの世に残った存在である。このことからあくまで「道徳的正しさ」とはニルヴァーナに至る一歩手前まで、境界線を越える前までの世界で通用する概念だ。ニルヴァーナに至る境界線を超えてしまう時に必要とされる、または超えた先で必要とされる「正しさ」とは別種のものであると考える。

また根本的問題として、「道徳的正しさ」とは高潔で素晴らしいと認識される時点で、それとは対照的な存在、例えば「不道徳」「苦しみ」という現実が内包されている。仮に苦しみが一切消滅したニルヴァーナで「道徳的正しさ」を実践したとする。するとそれが尊い行いであることを証明する比較対象が無いので、貶されることはもちろん賞賛されることもない。「道徳的正しさ」が「道徳的」だと認識されないのである。よって、「道徳的正しさ」も「苦」が無ければ成り立たないものだと分かる。

しかし、ここで終わると結局「正しさ」とは何なのかという深い疑問を抱くだけで終わってしまう。そのため、次の項目では本格的に「悟りで必要とされる正しさ」について深堀していく。

② 「悟りで必要とされる正しさ」

1107:「平静な心がまえと念いの清らかさ、一それらは真理に関する思索にもとづいて怒るものであるが、一これが、無明を破ること、正しい理解による解脱、であると、わたくしは説く」²。

この文より、「正しい理解による解脱」＝「無明を破ること」であると解釈できる。基本的に行動とは何かを理解した上でなされるものなので、こ

² 中村元 (2020年)『ブツダのことば—スッタニパーター』岩波文庫, 234頁。

こでの正しい理解（正見）とはその後続く解脱への修行内容である「八正道」の起点であり、筆者が考察しようとしている「悟りで必要とされる正しさ」そのものなのではなのだと思う。

「八正道」の項目の初めに述べたとおり、八つの項目でワンセットで一つ定まれば自動的に他も定まるとのことだ。ならば最初の八正道への入り口としては上記したように「正見」を徹底的に解明すると良いのではと思う。

しかし現時点では「悟りに必要な正しさとは正見のことで、それは無明を破ることです」とよく分からないことになってしまっている。説明しようにも修行での実践を想定した内容が入ってくるため、これ以降の考察は「正見」の項目に引き継ごうと思う。

（2）正見

前章で無明を破ることすなわち正見であると述べた。この項目では、「無明を破る」とはどういうことかという点に着目し、正見について考察していく。

「無明」³についての意味は注釈に載せさせてもらった通り「人生や物事の真相に明らかでないこと」とのことだが、具体的にその「真相」とは何か疑問に思う。その疑問の解決のため、実際に釈迦の言葉からその意味を考察できそうな部分が経典にあったので引用する。

3: 「まことでないものを、まことであると見なし、まことであるものを、まことではないと見なす人々は、あやまった思いにとらわれ

³ 「漢語〈無明〉（明無し）は目が見えない意で、『楚辞』9. 懷沙などに用例が見える。転じて、聡明さに欠ける意。仏教語としての〈無明〉は、人生や物事の真相に明らかでないこと。すなわち、すべては無常であり固定的なものはなにもない（無我）という事実は無知なこと。この無明がもとで固執の念（我見）をおこし、さらに種々の煩惱の発生となる。迷いの根本で、〈愚癡〉（moha）とも称され、〈貪欲〉（瞋恚）と合わせて三毒と言われる。また、十二縁起の第一支とされる。すなわち、無明を縁として、行・識・…・生・老死の諸法が生じ、無明が滅すれば、それらの諸法は滅するという」。中村元、福永光司、田村芳朗、今野達、末木文美士編（2002年）『仏教辞典第二版』岩波書店、94頁。

て、ついに真実に達しない。」

4:「まことであるものを、まことであると知り、まことでないものを、まことではないと知る人は、正しき思いにしたがって、ついに真実に達する。」

5:「(経験するものを) 実質のある物だと思って、走り近づいて行くが、ただそのたびごとに新しい束縛を身に受けるだけである。暗黒のなかから出て来た蛾が(火の中に)落ちるようなものである。かれらは、見たり、聞いたりしたことに心が執着しているのである」⁴。

ここで出てくる「まこと」とは「無明」の説明で出てくる「真相」と対応する部分だと思う。上記の引用から、「まことであるもの」と「まことでないもの」は何かという疑問が出てくるが5:の文より「まことでないもの」とは「(経験するものを) 実質のある物だと思って」という部分が当たるのだろう。

よって「(経験するものを) 実質のある物だということ、これがまことでない」つまり「無明」であるということだ。しかし、膨大な実験と証明によって築かれてきた社会で生きる私たちからしたら「確かに経験したと思ってきたことが真ではない」というのは、困惑するような結論だ。「幽霊や神という非現実的なことが「まこと」と言いたいのか」と思われるかもしれないが、主張したいことはそうではない。そのため、「実質のある」と思ってしまう要因である「経験」に注目して考察していく。

「およそ苦しみが生ずるのは、すべて識別作用(識)に縁って起こるのである」

「しかしながら識別作用が残りなく離れ消滅するならば、苦しみの生ずることがない」⁵。

⁴ 中村元 (2019年), 258頁。

⁵ 中村元 (2020年), 160頁。

経験とは視覚や聴覚などの感覚器官からの情報の集積によって成り立っている。上記の引用のように仏教では「視覚」「聴覚」「味覚」「嗅覚」「感覺」「意識」という6つの感覚とそれに対応する器官、受容作用などは、苦しみの根源として問題にされている。

ブッダは苦しみを生じさせないために6つの識別作用の消滅を勧めている。それは6つの器官作用によって生じた世界の消滅でもある。そう聞くと「消滅」とは全てが無に帰することを意味するのと思ってしまうかもしれない。しかし、筆者は6つの識別作用による経験を土台とした世界という枠組みから外れることを意味するのだと考える。つまり、「無明を破る」とは「識別作用の消滅」だと考えることができる。しかし、そんなことが可能なのだろうか、想像できないと思うかもしれない。

仮に上記したことが間違っていると仮定した場合、八正道の起点である「正見」での「正しさ」とは先程否定した「規律的正しさ」「道徳的正しさ」のいずれかという結論に行きつき、「苦」から逃れるための修行のはずなのに「苦」から逃れられない、という状況に陥ると筆者は考える。おそらく、「確かに識別作用が消滅した先があるのだ」と正確に理解できるか否かで「八正道」の意味合いは大きく変わるのではないだろうか。

仮に「無明を破ること＝識別作用の消滅」とする。だが、ここに問題がでてくる。実際に行動に移そうと思っても何をどうしたらいいのか分からないのである。そのために、「識別作用の消滅」と「無明」について更に深掘してみよう。「無明」に関しては煩惱を中心にしたものや四諦を中心にして分析したものなど諸説あるが、今回はちょうど「識別作用」と「無明」について触れた問答を経典内の学生アジタと師であるブッダの会話に見つけたため、これを中心に考察する。

1032 : アジタさんがたずねた、

「世間は何によって覆われているのですか？世間は何によって輝かないのですか？世間を汚すものは何ですか？世間の大きな恐怖は何ですか？それを説いて下さい。」

1033 : 師（ブッダ）が答えた、

「アジタよ。世間は無明によって覆われている。世間は貪りと怠惰のゆえに輝かない。欲心が世間の汚れである。苦悩が世間の大きな恐怖である、とわたしは説く。」

1034：アジタさんがいった、

「煩惱の流れはあらゆるところに向かって流れる。その流れをせき止めるものは何ですか？その流れを防ぎまもるものは何ですか？その流れは何によって塞がれるのでしょうか？それを説いてください。」

1035：師は答えた、「アジタよ。世の中におけるあらゆる煩惱の流れをせき止めるものは、気をつけることである。(気をつけることが) 煩惱の流れを防ぎまもるものである、とわたしは説く。その流れは智慧によって塞がれるであろう。」

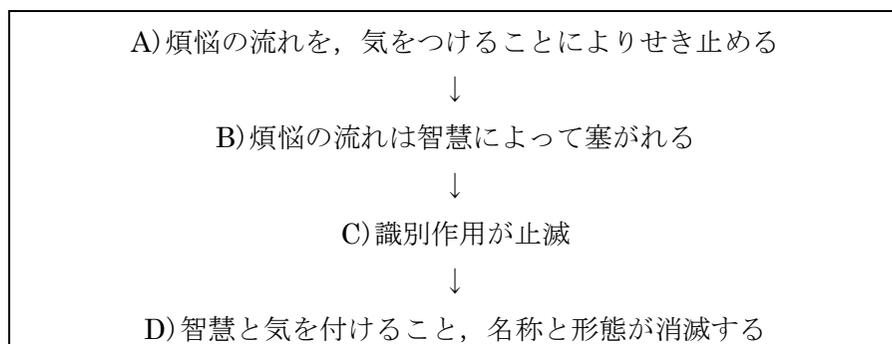
1036：アジタさんがいった、「わが友よ。智慧と気をつけることと名称と形態とは、いかなる場合に消滅するのですか？おたずねしますが、このことをわたしに説いてください。」

1037：「アジタよ。そなたが質問したことを、わたしはそなたに語ろう。識別作用が止滅することによって、名称と形態とが残りなく滅びた場合に、この名称と形態とが滅びる」⁶。

1033 と 1034 の引用文で内容の切り替わりがあり、一つの会話の問答のはずなのに話題が変わったように感じる。おそらく、1032～1033 の引用文が問題提起であり、1035～1037 までの文がその詳細についての内容だと思われる。そのため、無明や貪り、怠惰、欲心、苦悩などを解決するためには、どれも 1035～1037 の引用文を参考にした行動をとることが大切だと考えられる。

対象の引用の流れを簡略化すると以下の4つの工程に分けられた。工程ごとに考察してみたいところだが、B)以降は八正道全ての内容を含めると判断したため、今回の「正見」の項目では「A) 煩惱の流れを、気を付けることによりせき止める」までを取り扱うものとする。

⁶ 前掲書 (2020年), 218頁。



A) 煩悩の流れを、気をつけることによりせき止める

おそらく悟りへの修行においては「煩悩の流れ」をせき止めることが最も重要で、解脱への道筋の始まりである。煩悩の流れは「気をつける」ことで止められるそうだが、具体的に何を気をつけるのだろうか。

筆者は、この「気をつける」を「観察」に言い換えられるのではと考えている。その理由としてはスッタニパータの「第三大いなる章十二節二種の観察」にある。

「これは苦しみである。これは苦しみの原因である」というのが、一つの観察〔法〕である。「これは苦しみの消滅に至る道である」というのが、第二の観察〔法〕である⁷。

726: しかるに、苦しみを知り、苦しみの生起するもとを知り、また苦しみのすべて残りなく滅びるところを知り、また苦しみの消滅に達する道を知った人々、—⁸

ここからは「観察〔法〕」と 726 の引用文、そして釈迦が悟るにあたり非常に重要な行為となった「瞑想」と照らし合わせて考えてみる。

「瞑想」の初期段階ではひたすら溢れ出てくる思考をただ観察すること

⁷ 前掲書 (2020 年), 156 頁。

⁸ 前掲書 (2020 年), 同頁。

が求められる。実際にそのように瞑想を実践してみると、多くの人がいかに膨大な思考が日々自動的に生成され、それによって日常生活が埋め尽くされているか知ることになる。観察を続けるとそれらの思考が負の感情とそれに裏打ちされたものであると気づき、ここから全てが「苦しみ」である、「一切皆苦」という結論に行き着く。ここまでが、726 引用文での「然るに苦しみを知り」であり、「一つの観察〔法〕」の『これは苦しみである』の部分である。

この結論に行き着いた後ひたすらこれを観察し、向き合う必要がある。はじめは観察することはいっぱいだが、次第に余裕が出てくる。そして、その思考が川の流れのようにどこからか流れ、消えていくことに気がつく。恐らくこれが「煩惱の流れ」と呼ばれるものであり、「苦しみ」とは生まれ、滅びるものなのだとして理解することとなる。そして、その流れのようなもの出所を辿ると思考や感覚、自己の認識すらできない状態を体験することになる。恐らくこれが上記した「消滅」に当たるのだろう。

ここまでが「一つの観察〔法〕」の『これは苦しみの原因である』であり、726 引用文の「苦しみの生起するもとを知り、また苦しみのすべて残りなく滅びるところを知り」にあたる。

しかしこの「消滅」の状態も一瞬のもので、慣れない状況に拒絶反応を起こすのかすぐさま煩惱の流れの中に戻ってしまう。恐らく人間とは未知の体験をした時、本能的にその場から逃げ出してしまう癖がある。しかし、「消滅」への辿り着き方はすでに会得できたのでこれを、「第二の観察〔法〕」
「これは苦しみの消滅に至る道である」、726 引用文の「また苦しみの消滅に達する道を知った人々」にあたるのだと思う。よって気をつけるとは「観察」することであると考えられる。

以上から、「無明を破る」とは「識別作用の消滅」であり、その方法は瞑想における思考や苦しみの観察によりなされるという結論に至った。注意しておきたいのは、ここで述べている「識別作用の消滅」とは一時的な消滅であり、「C 識別作用が止滅」のような完全な消滅のことを指しているのではない。別の言い方をすれば「智慧」とはいかなくてもそれに確実につながることを確信した直観であり、筆者自身、八正道を行うにはまずこれ

を正しく身につけることが非常に大切なのだと考える。

先程「消滅—ニルヴァーナ」と述べたことから察するかもしれないが、筆者が考える「正見」とは消滅（ニルヴァーナ）の一時的な体験である。修行の瞑想過程で一瞬だけその境地を体験して確かに煩惱を止めて六識を止滅させた先があると確信が得られるタイミングが訪れるのだと思う。その確信が得られるということは、いわばゴール地点にフラグを立てられたということであり、そこからが八正道の本格的な実践の開始であると考ええる。

2. 実践

正見の考察を基に改めて八正道を実践するとどうなるか。おそらく前章の項目で触れた 1035～1037 の引用文 B) 以降の内容になってくるのだと思う。

煩惱の流れは智慧によって塞がれるとのことだが「智慧」とは何かというと、

「一切の現象や現象の背後にある道理を見極める心作用」⁹。

六波羅蜜¹⁰においては、

「六波羅蜜の中ではこの智慧（般若）波羅蜜が肝心とされ、前の五波羅蜜はこれを得るための準備手段として要請される」¹¹。

とあるように、正見を得た後の修行の過程でもかなり後に得られるものであると分かる。そのため、3. 正見の引用文 1032～1037 の簡略工程 A) と B) には大きな間があり、そこに八正道や六波羅蜜が集約されることとなる。

⁹ 前掲書（2002年）、696頁。

¹⁰ 大乘仏教において菩薩に課せられた6種の実践徳目で…1) 布施波羅蜜：財施，法施（真理を教えること）無畏施。

¹¹ 前掲書（2002年）、1073頁。

八正道と六波羅蜜の内容を比較すると、精進波羅蜜や禪定波羅蜜など内容が類似する部分がある。六波羅蜜が大乗仏教という釈迦が入滅してからだいぶ経った後の宗派の概念であることから、元は八正道であり、そこから大乗仏教で重視される菩薩のから派生して新たに設けられた修行徳目なのではと考えられる。そのため、八正道を極めた先に得られるものが「智慧」であり、これによって、「消滅」の状態が永遠となり、「C) 識別作用が止滅」「D) 智慧と気を付けること、名称と形態が消滅する」に繋がり、完全な悟りの境地に達するのだと考える。

では、具体的にどのように八正道を極めるかという、識別作用の消滅の状態を通常状態にすることだと思う。先程述べた通り、一時的に「消滅」とはどういうことか触れられたとしてもそれは一瞬のことですぐに元の煩悩の状態に戻ってしまう。そのため、常に正見を得た状態を保っているか自身を監視する手がかりとして他7つの項目があるのだと思う。「正見」という軸がぶれたら必ず7つのうちいずれかに影響するため、常に八正道を実践し続けることが重要なのだ。

3. 悟りを開いた後の変化

過去の修行者完成者達の様子から考えると、彼らは何かしらの境界線を越えて「私は悟りました」と自己申告するような境地に至っていることが分かる。このことから、何らかの変化があったことは明白だが、具体的にどのようなものだったのか。それを探るにあたり、改めて六識について考えてみる。

六識とは身体に付属する肉体器官と深いつながりがあることから、現世のみに存在する機能なのではと考えられる(仏教の世界観に基づいて死後の世界や来世、過去世がある前提で話を進める)。では、その現世のみに存在する機能を止滅させると何が残るのかと考えると、身体以外、例えば魂や霊などの世間一般的には非科学的だとされる部類の器官が表面化することとなる。

我々の感情の起伏に深く関わる煩悩を止める手段である六識を止滅した場合、我々がどうなるのかという疑問が出てくる。感情の起伏や感動が

一切ない人形のような人格になるのだろうか。筆者はそうは考えない。経典を元に推察すると、確かに煩惱に伴う「激情」のようなものはなくなってしまふかもしれないが、その代わりに永遠に続く平常心や安心感、静かさや静かな楽しさや嬉しさ、何かつきものが落ちたような諦めの境地のままその一生を終えるのだろう。おそらくこのような言葉は悟りを開いた境地の感覚 100%正しく表現しているとは言い難いだろうが、現世に存在する六識の機能を止滅させた後に残る智慧や直観とはそういうものだと思う。

結び

以上、ニルヴァーナにまつわる経典に対する筆者の考察だ。悟りの境地に到達する大前提として八正道の「正しさ」を正確に把握しなければならない。しかし、この大前提に到達するのにも中々骨が折れるもので、この「正しさ」を得るには本稿の「正見」の項目で述べた、瞑想による「消滅」の境地に一度触れなければ話にすらならない。かといって、消滅の境地に触れようと躍起になればなるほど目的からかけ離れることとなる。

では、どうすれば良いのか。あくまで筆者の考えだが、ここまで本稿を通して一連の流れで重要なのが「正見」を得る以外にもう一つある。それが「極限まで苦しむ」というものである。仏教では世界の始まり、苦しみの始まりに関して考察することは、悟りを目指すうえで不必要な上に余計な迷いが発生するのでタブーとされている。

しかし、あえてこの始まりに対してどうしても思ってしまうことがある。それは「人とは苦しむために生まれてきたのではないだろうか」ということだ。筆者は世の中とはその姿かたちは合理的に計算されて無駄ないのだと思う。ならば、人の苦しみもその枠組みの範疇に入らないだろうか。例えば理想郷は凡夫から見て徹底して合理性を追求した先にある世界である。無駄を一切排除した先にあるのは全知全能、無限であり、0、消滅と表裏一体なのだと思う。

しかし、現実理想郷とは程遠い。現実と理想郷を隔てるものは何かと考えた時、筆者は「苦しみ」であると感じた。仮に生きる目的とは「苦し

む」体験そのものであるとする。すると「極限まで苦しむ」という体験は生きる目的を達成された状態なので、この世に用が無くなった状態である。だからその時点で「苦」からの脱却、輪廻からの解脱ルートに路線が切り替わりやすいのではないだろうか。悟りの境地を目指す修行者が、わざわざ「苦行」と呼ばれる修行を自ら行う理由もこの考えを元にと理にかなっている。「苦しみ」の背景には人々が求める「安楽」があり、苦しいからと言って忌諱することはすなわち永遠の安楽からの逃避である。そう考えると、人が持つ「汚れ」に対する本能的な嫌悪感も一連の目的を達成するためには非常に合理的で優秀な機能の内の一つである。

どちらにせよ悟るには、絶妙なバランスで「消滅」の境地に触れ続けてそれを常態化するか、従来の修行者のように「極限まで苦しむ」の二択だと筆者は考える。どちらの道を選ぶにも相応の覚悟と時には今までの常識や生活を離れる決断が伴う。

[参考文献]

中村元（2020年）『ブッダのことば—スッタニパータ』岩波文庫。

中村元（2020年）『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波文庫。

中村元，福永光司，田村芳朗，今野達，末木文美士編（2002年）『仏教辞典第二版』岩波書店。

日本テーラワーダ仏教協会「初期仏教の世界心を育てるキーワード【八正道】」<http://j-theravada.com/world/keyword/keyword-16/>（最終確認：2025年1月25日）。

慈濟日本のサイト https://xn--tw-r24cp01dlu5d.tzuchi.org/jp/index.php?option=com_content&view=article&id=485&Itemid=198（最終確認：2025年1月25日）。